水田の雑草管理に努めましょう

収穫共済課

雑草は、病害虫ほど直接的に作物に影響を与えることはありませんが、放っておくと作物と競合し、光・水分・養分等を奪い作物の品質を低下させてしまいます。
また、雑草は密生し農作業の妨げとなるほか病害虫の温床にもなります。
雑草は大きく分けて、〈一年生雑草〉と〈多年生雑草〉とがあります。

〈水田によく見られる雑草の種類と特性〉

一年生雑草	イネ科	ヒエ類（タイヌビエ/ケイヌビエ/ヒメタイヌビエ）
	カヤツリグサ科	タマガヤツリ/カヤツリグサ/ヒデリコ/ハリイ/コゴメガヤツリ
	広葉雑草	ミゾハコベ/アゼナ/コナギ/アブノメ/キカシグサ/ホシクサ
	特性	◎種子から発芽して枯れるまでが1年以内。 ◎容易に引き抜け、引き抜くと根がついてくる。 ◎広葉雑草の場合、幼植物には子葉がある。

多年生雑草	イネ科	スズメノヒエ/ムツオレグサ
	カヤツリグサ科	マツバイ/クログワイ/ミズガヤツリ/アゼガヤツリ
	ヒルムシロ科	ヒルムシロ
	広葉雑草	オモダカ/ミズハコベ/ウリカワ/セリ
	特性	◎地上部が枯れても地下にある塊茎などの栄養繁殖体が残るため、複数年にわたって生き続ける。 ◎引き抜きにくく、引き抜くと根が切れてしまう。 ◎根と一緒に根茎などがついてくる。

ヒエ類やカヤツリグサなどの一年生雑草は、種子が小さく地面から比較的浅いところで発芽するので、除草剤が効きやすいといった特徴があります。
オモダカやクログワイなどの多年生雑草は、発生源となる塊茎などの栄養繁殖体が低温・乾燥に弱いため、秋期・冬期間の耕起が有効となります。
雑草を駆除するには除草剤を使用する化学的防除法が最も有効ですが、除草剤は雑草以外の作物や土壌微生物にも影響を与えてしまいます。また、最近では除草剤の繁用により抵抗性を持った品種も現れています。
このため、まずは対象の雑草の生育条件・特性を理解し、化学的防除法・耕種的防除法・物理的防除法・生物的防除法を組み合わせた防除を行って発生量を減らすことが基本となります。

防除方法

◎化学的防除法
化学合成または天然由来の農薬使用により雑草を抑制する方法。

◎耕種的防除法
栽培する方法を変えることにより雑草の生育を抑える手法。
秋期・冬期の耕起、深水管理、田畑輪換など。

◎物理的防除法
ロータリー耕うん機や除草機などの農機具を使用した機械除草、中耕など。

◎生物的防除法
アイガモなどを用い雑草を除去する方法。

冬期の耕起・田畑輪換・深水管理などの手法や、除草剤のローテーション使用、雑草の要防除水準を考えて防除するなど、多様な手法の組み合わせを意識して水田の雑草管理に努めましょう。

〈参考文献〉有江 力 監修『図解でよくわかる 病害虫のきほん』誠文堂新光社
平成29年 山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準 参照

小型無人航空機「ドローン」で水稲防除を

周南支所

農事組合法人 下郷農業構造改善組合
（藤井猛組合長、組合員17人）

藤井組合長（左から2人目）とドローン防除のメンバー

周南市の「農事組合法人下郷農業構造改善組合（水稲22・9㌶、大豆4.5㌶）」は今年から小型無人航空機「ドローン」による水稲防除を始めた。
同組合では昨年まで水稲防除は外部委託によるヘリ防除だったがこの度、防除用ドローンを購入。
藤井組合長（74歳）は「ヘリに比べ導入コストが安かったので購入を決意しました。今後は適期防除が可能になる」と期待を寄せる。
現在、同組合のオペレーターは5人。3人1組で防除作業にあたる。ドローンはヘリと比べ1回の飛行時間は短いものの、小回りが利くので比較的、狭い圃場でも防除が可能になるという。
今年度は同組合の全ての水稲圃場でドローンによる防除を実施した。

ドローンを操縦し、防除を行うメンバー

自然薯を基幹作物へ

美祢支所

農事組合法人 ほんごうファーム
（植山正雄組合長、組合員69人）

「自然薯の産地復活を目指します」と話すのは、「農事組合法人ほんごうファーム」6次産業担当部長の吉武権平さん（68歳）。同法人は、平成29年に約5㌃の畑で、試験的に300本の栽培に取り組んだ。
収穫した自然薯は、同組合で開催する「秋の収穫祭」で振る舞った。平成30年からは、面積を20㌃に増やし、本格的な栽培にむけてのPRも行うという。
地域の高齢化が進む中、植山組合長（72歳）は「冬場にも安定した収入が見込める自然薯を、基幹作物の一つに据え、若い担い手が定着できるような環境を整えていきたい」と話す。

「昔は自然薯栽培に適した土地を利用して広く栽培が行われていた」と植山組合長（左）、吉武6次産業担当部長

秋の収穫祭で自然薯料理を振る舞った

"本当においしいミカン"を提供したい

佐波支所

白井 康太さん（32歳）

ミカンは主に直売所（JA富海ふれあい店舗）や道の駅『ソレーネ』に出しています

本当においしいミカンをつくろうと、防府市富海の白井康太さんは、品種の特性を活かしたミカン栽培（「南柑20号」「津之輝（つのかがやき）」など1.5㌶）に取り組んでいる。
白井さんの栽培方法は、収穫時期を遅らせて、ミカンがよく熟した時に収穫するという方法だ。木に成らせている時間を通常よりも長くすることで、より良食味になるという。
「一般的にミカンが多く出回る時期を避け、比較的少ない時期に一番おいしく食べられる品種を選んで栽培しています。まだ収量は多くはありませんが、味にこだわって、お客さんに本当においしいミカンを提供していきたいです」と話している。

古い木から新しい品種（「津之輝」など）の木へ植え替えているという

みんなのひろば

誘引作業に精を出す中山さん

農業の楽しさがわかってきました

西部総合支所

中山　直さん（52歳）

「親の背中を見て、専業農家には絶対ならないって思っていた」と、笑顔を見せる下関市川中の中山直さん。父親から受け継いだビニールハウスは3棟（約17アール）。そのうち単棟と連棟あわせて約10アールで、キュウリとトマトを交互に作付、また約7アールの連棟でシュンギクを栽培する。

7年前、父が体調を崩したことをきっかけに「自分がやらなければ」という気持ちが強くなり、父の農業の引退とともに会社を退職し就農を決意した。

手を加えたら加えた分だけ結果が現れる農業に面白みを感じているそうで、「今なら父が農業を楽しんでいた理由が分かります。5年先には栽培面積を1.5倍にし、品質は低下させず、今よりもっと収穫量を増やしたい」と笑顔で話す。

父から受け継いだビニールハウス

地域の憩いの場に、平成29年6月にオープン

阿武萩支所

うおなの郷

魚の「うお」、野菜の「な」から命名。「うおなの郷」が阿武町宇田の国道191号沿いにオープン。地元で取れた新鮮な野菜や魚などを販売し、地域住民の生活に欠かせない店舗となっている。

これまでも食料品や生活雑貨を扱う店舗はあったが、高齢化や人口の減少が進み経営が厳しい中、店舗存続のために県内初となる農協と漁協が共同運営する店舗として生まれ変わり、両者の職員が運営にあたっている。

農協の大谷恵子さん（50歳）は「買物だけでなく、お客さんとの交流もあり、地域住民のニーズに応えられていますね」。

◎お問い合わせ先
「うおなの郷」
☎083-88・4・0311
営業時間／平日9時～17時、土曜日9時～12時30分

「うおなの郷」

「新鮮な商品がたくさんですよ」と、大谷さん（左）と漁協の恵美奈美智代さん

美蔵屋

「美蔵屋」のかきもちをどうぞ

阿東支所

古谷　美代子さん（65歳）

道の駅が盛況だった平成11年、「より地元の商品を」という想いから自宅の加工場でかきもちを作りはじめた古谷美代子さんは、3年前国道9号線沿いの空いていた土地に、大工をしているご主人が建てた店舗兼加工場で「美蔵屋」を開店した。

地元のはぜかけ米を使って、無添加・無着色のかきもちを生産。JRの駅やSL内、地元の道の駅で販売をし、ふるさと納税の返礼品などにも使われている。

「基本的には、注文生産のみ、造り置きはしないため急な注文を受けると大変です」と古谷さん。先日も、東京の「おいでませ山口館」から急な注文があり大忙しだったという。「今後は、お茶をしながらかきもちを食べられるような、くつろげる店にしていきたいです」と話している。

商品を並べる古谷さん（右）

力強い粘りと味がある「俵山の自然薯」

長門支所

増野　孝久さん（89歳）

「お客さんの喜ぶ顔が見たい」。長門市俵山で、20年以上自然薯栽培に尽力した増野孝久さんの原動力だ。

市役所の職員に勧められたことがきっかけで、独学で栽培を開始。人工栽培が難しいとされる自然薯の安定的な生産を、試行錯誤しながら確立し、栽培面積も増やしてきた。

販売は地域の直売所に出すのみだったが、平成28年から地域の女性グループが担当。スマートフォンによる販売管理や積極的な売り込みによって、県外からも注文がくるようになった。

増野さんは「若い人の力はすごい。これからは販売だけでなく栽培も任せたいと思う」と俵山の自然薯の展望をにこやかに話す。

良い自然薯が、たくさん収穫できました

俵山の自然薯

抜穂式が行われました

田布施支所

久光　博明さん（69歳）

秋の宮中行事「新嘗祭」に献上される新米を刈り取る抜穂式が、田布施町麻郷の久光博明さんの水田で行われた。

神事が執り行われた後、地元住民が見守る中、久光さん夫妻と関係者、地元高校生などが扮した絣の着物姿の刈女ら17人が、一列に並び、黄金色に色づいた「はえぬき」を鎌で一株ずつ刈り取った。

奉耕者の久光さんは、「多くの人の励ましを受けながら無事に収穫を迎えられた。あらためてご支援いただいた方々に感謝申し上げます」と謝辞を述べた。

11月に皇居で行われた新嘗祭には、精米した米1升が献上された。

抜穂式の様子

西岐波で末永みかん園を始めました

厚狭地区支所

末永　憲次さん（68歳）

きっかけは、平成29年3月に「園地を引き継いでもらえないか」と相談を受けたこと。不安な面は多くあったが家族と相談し園地を引き継ぐことを決意した。

園地面積は約50アール。よく手入れがされていて、温州みかんの他にもポンカンや柿、栗などが栽培されていた。

管理方法など、近隣の農家からアドバイスをもらい栽培したのは上野や宮川などの品種。宇部市内の新鮮館に出荷し好評を得た。

「休日には家族や身内が作業を手伝ってくれて絆も強くなりみかん園を始めてよかった」と話す。

収穫作業をする末永さん